

要注意外来生物リスト（被害に係る一定の知見はあり、引き続き指定の適否について検討する外来生物）

鳥類

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状
インドクジャ	<i>Pavo cristatus</i>	生態系（競合・駆逐）	<p>沖縄で捕食等による被害が発生しており、駆除も進められているが、沖縄以外では定着・繁殖のおそれは低い。被害が沖縄地域に限定的である一方で、国内の学校、公園、観光施設等で多数が飼育されていることから、沖縄諸島、八重山諸島等で積極的な防除を検討・推進する必要がある。</p> <p>適切な管理の実施が重要であり、特に沖縄などでは、本種のこれ以上の導入、移動を控え、飼育施設や飼育方法に留意し、逸出等がないよう十分注意して管理すべきである。</p>	<p>沖縄県の離島に被害報告が集中している。ただし、沖縄以外では大きな被害報告はない。沖縄県小浜島、与那国島、新城島、宮古島などで防除が行われている。年間で1~4件程度の逸出に関連する報道があり、例年一定数は逸出、遺棄が発生していると思われる。沖縄以外にも鹿児島県、宮崎県、広島県、香川県、和歌山県、愛知県、東京都、茨城県で野生化の実態が確認されている。また東京都の多摩動物公園や茨城県大和村でも繁殖がみられたことが報告されており、条件が整えば鹿児島以北での繁殖可能であると思われる。</p> <p>感染症予防法の改正後に、動物由来感染症対策が整備され、平成17（2005）年9月1日から海外からの輸入に関しては、届出書の提出および輸出国政府機関発行の衛生証明書の添付が義務づけられるようになっている。</p>

参考：財団法人自然環境研究センター（編）．2008．決定版日本の外来生物．平凡社．
環境省自然環境局野生生物課．2008．平成19年度外来生物問題検討業務報告書．

爬虫類

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状
カミカメ	<i>Trachemys scripta</i>	生態系（競合・駆逐、捕食）	<p>繁殖確認事例は少ないが、遺棄や逸出による個体が野外で広く定着しており、在来種への競合等による影響がある可能性がある。</p> <p>大量に飼育されており規制により代替となるカメ類の輸入が増大する可能性や、大量に遺棄される可能性などが考えられ、今後の被害知見の集積とともに、遺棄のリスク評価や飼育に関するマナーの向上が特に必要である。</p> <p>販売、飼育にあたっては、長生きすることや大きくなることを十分理解し、飼い主が責任を持って飼育することを確認する必要がある。</p> <p>日本の侵略的外来種ワースト100（日本生態学会）。 世界の侵略的外来種ワースト100（IUCN）。</p>	<p>本種は最も大量に輸入されている爬虫類である。明確な統計はないが、少なくとも1990年代には年間に100万匹程度がアメリカより日本に輸出されていた。また2004~2006年には50万匹程度が輸入されていると推測できる。ただし、外来生物法施行以降は、その輸入量は25万匹程度と前年までの50%程度に減少もしている。一般へのアンケート結果では約2.6%の家庭が本種を飼育していると回答している。子供のいる世帯では高い割合で本種を飼育中（または飼育経験がある）と推測された。また、飼育経験がある場合、約20%が野外に逸出させていると考えられた。</p> <p>佐賀県では条例で移入規制種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2006年4月1日施行）。</p> <p>愛知県では条例で条例公表種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2010年6月30日指定）。</p>

参考：財団法人自然環境研究センター（編）．2008．決定版日本の外来生物．平凡社．
環境省自然環境局野生生物課．2008．平成19年度外来生物問題検討業務報告書．

魚類

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注外来生物選定当時の摘要	現状
タイクハバラタナゴ	<i>Rhodeus ocellatus</i>	生態系（競合・駆逐、遺伝的攪乱）	全国各地の池沼や水路、河川等に定着し、交雑による遺伝的攪乱等により亜種ニッポンバラタナゴを駆逐してきた。ただし、 觀賞魚として多数の飼養があり、直ちに規制を行なうと大量に遺棄を生じ、かえって被害が増大するおそれがある。 また、形態的特徴のみで亜種間の識別を行うのが難しく、防除の実施も非常に困難であるのが実状である。まずは、飼養に当たり野外への遺棄を起こすことがないように、関係業者や利用者に普及啓発を行なうことが重要。 日本の侵略的外来種ワースト100 (IUCN)。	指定時と状況は変わっていないため、今後も引き続き指摘の適否を検討することが適当。 佐賀県では条例で移入規制種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2006年4月1日施行）。 滋賀県では条例で指定外来種に指定し、飼育者に対し届け出を義務づけるとともに、野外へ放すことを禁止している（2007年5月1日指定）。
ニジマス	<i>Oncorhynchus mykiss</i>	生態系（捕食、競合・駆逐）	在来のサケ科魚類や水生昆虫等に影響を与える可能性が指摘されていることに留意し、適切な管理を行なうことが重要。全国的に養殖や管理釣り場で利用され、遊漁を目的として各地の水域に導入されているにもかかわらず、今のところ 北海道等の限られた地域でしか繁殖が確認されておらず、今後とも全国的な被害に発展する可能性は低いものと考えられる。 日本の侵略的外来種ワースト100 (IUCN)。 世界の侵略的外来種ワースト100 (IUCN)。	指定時と状況は変わっていないため、今後も引き続き指摘の適否を検討することが適当。2009年6月、保護団体からの外来種であることの指摘があったにもかかわらず、静岡県富士宮市がニジマスを市魚に指定した。 (毎日新聞（2009年04月21日、05月13日記事）)
ブラウントラウト	<i>Salmo trutta</i>	生態系（捕食、競合・駆逐）	遊漁を目的として導入されたものが定着したあと、在来のサケ科魚類やヨシノボリ類などが急減するなど、在来生物相に影響を及ぼしていることが指摘されており、適切な管理を行うことが重要。捕食による在来種への影響等は主に北海道で確認されている。 本州の4府県で漁業権が設定されている。 日本の侵略的外来種ワースト100 (IUCN)。 世界の侵略的外来種ワースト100 (IUCN)。	魚類だけでなくニホンザリガニの補食も報告されている。水産庁の調査によると養鱒業者による年間の総生産量は約100トンで、漁業権漁場への放流量は約11万尾である。釣りの人気が高く全国29都道府県の約130カ所の管理釣り場で利用されていることがわかった。長野県では繁殖能力のない養殖品種が開発され、「信州サーモン」として利用されている。 (環境省自然環境局野生生物課、2008、平成19年度外来生物問題検討業務報告書。) 滋賀県では条例で指定外来種に指定し、飼育者に対し届け出を義務づけるとともに、野外へ放すことを禁止している（2007年5月1日指定）。
カワマス	<i>Salvelinus fontinalis</i>	生態系（捕食、競合・駆逐、遺伝的攪乱）	北海道や本州の一部でイワナ属魚類との交雑が確認されている。本州での自然繁殖の事例は少ないが、イワナ類等の生息域に導入すれば定着する可能性があり、分布を拡大することがないように適切な管理を行うことが重要。 栃木県では、長年にわたり研究対象とされているが、この地域からの自然の分布拡大は確認されていない。	指定時と状況は変わっていないため、今後も引き続き指摘の適否を検討することが適当。 滋賀県では条例で指定外来種に指定し、飼育者に対し届け出を義務づけるとともに、野外へ放すことを禁止している（2007年5月1日指定）。

魚類

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状
ガッピー	<i>Poecilia reticulata</i>	生態系（競合・駆逐）	沖縄島等で定着し、在来のメダカに影響を及ぼす可能性が指摘されている。ただし、 全国的に多数の飼養者がある一方で、定着の可能性が想定されるのは琉球列島や温泉地等に限定されており、今後とも全国的な被害に発展する可能性は低いものと考えられる。 まずは、飼養に当たり野外への遺棄を起すことがないように、関係業者や利用者に普及啓発を行なうことが重要。	指定時と状況は変わっていないため、今後も引き続き指摘の適否を検討することが適当。

無脊椎動物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状
アメリカザリガニ	<i>Procambarus clarkii</i>	生態系（競合・駆逐、捕食、環境攪乱など）	特に希少な水草や水生昆虫への影響が懸念されるが、 既に蔓延している地域が多く、また、ペットとしての飼養も極めて多いため、適正な執行体制の確保や効果的な防除が困難である。 個体の移動や分散につながるような利用をやめるよう十分に注意することが必要であり、特にニホンザリガニの生息域で、本種がまだ蔓延していない北陸の一部、北海道、沖縄の島嶼部などには持ち込まないなど、特に慎重な対応が必要である。 日本の侵略的外来種ワースト100 (IUCN)。	指定時と変わらず、最も身近な水辺の生き物である。依然として子供の人気は高く、教材としても扱われている。また国内で養殖を行っている団体もある。外来ザリガニが特定外来生物に指定されたことにより、これまで外来ザリガニの飼育と楽しんでいた人々は、現在、規制対象外であるアメリカザリガニの色彩変異個体の飼育を楽しむ方向に動いている。 (環境省自然環境局野生生物課、2007、平成18年度外来生物問題検討業務報告書。) 選定以降、アメリカザリガニの被害に関するシンポジウムが実施され(神奈川県、2010)、水草や水生昆虫への影響被害の報告(西原、2010など)がなされる等被害に係る知見の普及、蓄積が進んでいる。
ムラサキガイ	<i>Mytilus galloprovincialis</i>	生態系（競合・駆逐、遺伝的攪乱）、農林水産業	既に広範囲に分布 しており、内湾生態系を一変させてきた。養殖貝類・取水施設等への付着により多大の被害を与えている。在来種との交雑が発見されており、遺伝子攪乱が懸念される。 防除は困難 であるが、大量発生時の汚染被害等に注意が必要。 一部で養殖が行われている。 日本の侵略的外来種ワースト100 (IUCN)。 世界の侵略的外来種ワースト100 (IUCN)。	指定時と状況は変わっていないため、今後も引き続き指摘の適否を検討することが適当。ほぼ全国に定着し、現在も分布を拡大している。 人工構造物への汚染被害の軽減のために、手作業による清掃や付着防止技術の開発が進められている。
ミドリガイ	<i>Perna viridis</i>	生態系（競合・駆逐、遺伝的攪乱、環境攪乱）、農林水産業	養殖貝類・取水施設等への付着により多大の被害を与えている。 既に広範囲に分布しており、非意図的に拡散するため、規制による効果は少ない と考えられる。大量発生時の汚染被害等に注意が必要。	指定時と状況は変わっていないため、今後も引き続き指摘の適否を検討することが適当。千葉県から鹿児島県までの太平洋側の広い範囲と、日本海側の一部に生息している。 人工構造物への汚染被害の軽減のために、手作業による清掃や付着防止技術の開発が進められている。

参考：財団法人自然環境研究センター（編）、2008、決定版日本の外来生物、平凡社。

無脊椎動物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状
カサネザシ	<i>Hydroides elegans</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）、農林水産業	<p>養殖カキの殻表面に付着し養殖業に多大な被害を与えたほか、取水施設への汚損被害を引き起こしている。被害に係る知見は多いが、既に広範囲に分布しており、駆除、防除が難しい。大量発生時には汚染被害等に注意が必要。</p> <p>日本の侵略的外来種ワースト100 (IUCN)。</p>	<p>指定時と状況は変わっていないため、今後も引き続き指摘の適否を検討することが適当。養殖カキや人工構造物への被害軽減のため、手作業による生息活動や付着防止技術の開発が進められている。</p>

参考：財団法人自然環境研究センター（編）、2008、決定版日本の外来生物、平凡社。

植物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状	導入・利用の形態	
					意図的導入	水草
オカナダモ	<i>Egeria densa</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> 各地の湖沼に侵入し、クロモ等の在来の水生植物と競合し駆逐している。 大量に利用されているため規制による大量遺棄のおそれがある。既に広範囲に蔓延しているため指定の緊急性は低い。 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起ささない適切な方法で行うことが重要である。 関係業者や利用者は、責任を持って栽培し、栽培できなくなった場合は野外へ遺棄することなく、適切な処分を行うことが必要である。 在来種との競合・駆逐等のおそれがあるため、積極的な防除または分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 日本の侵略的外来種ワースト100 (IUCN)。 	<p>指定時と状況は変わっていないため、今後も引き続き指摘の適否を検討することが適当。</p> <p>佐賀県では条例で移入規制種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2006年4月1日施行）。</p>	意図的導入	水草
コカナダモ	<i>Elodea nuttallii</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）	<ul style="list-style-type: none"> 各地の湖沼に侵入し、クロモ等の在来の水生植物と競合し駆逐している。 輸入、流通、販売が行われていないので、規制による効果は小さい。既に広範囲に蔓延しているため指定の緊急性は低い。 在来種との競合・駆逐等のおそれがあるため、積極的な防除または分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 日本の侵略的外来種ワースト100 (IUCN)。 	<p>指定時と状況は変わっていないため、今後も引き続き指摘の適否を検討することが適当。</p> <p>佐賀県では条例で移入規制種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2006年4月1日施行）。</p>	意図的導入	水草

植物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状	導入・利用の形態	
ホテイアオイ	<i>Eichhornia crassipes</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> 既に各地の湖沼等で野生化している浮遊性の水草で、水面を覆い尽くし光を遮ることで在来の水生植物の生存を脅かすとともに、アレロパシー作用等を通じて水生生物全体へ影響するおそれがある。 大量に利用されているため規制による大量遺棄のおそれがある。既に広範囲に蔓延しているため指定の緊急性は低い。 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起ささない適切な方法で行うことが重要である。 関係業者や利用者は、責任を持って栽培し、栽培できなくなった場合は野外へ遺棄することなく、適切な処分を行うことが必要である。 在来種との競合・駆逐等のおそれがあるため、積極的な防除または分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 湖沼の水質浄化やビオトープ創出等を目的とした水草の利用には、在来種を利用することが望まれる。 世界の侵略的外来種ワースト100 (IUCN)。 日本の侵略的外来種ワースト100 (IUCN)。 	指定時と状況は変わっていないため、今後も引き続き指摘の適否を検討することが適当。 佐賀県では条例で移入規制種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2006年4月1日施行）。	意図的導入	水草
セイカアワダチソウ	<i>Solidago altissima</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）	<ul style="list-style-type: none"> 河川敷等でみられる大型の多年生草本で、絶滅危惧種を含む在来植物との競合や駆逐のおそれが大きい。 現在では輸入、流通、販売は行われておらず、規制による効果は小さい。既に広範囲に蔓延しているため指定の緊急性は低い。 既に各地の河川敷や荒地等で野生化しているが、希少種等との競合・駆逐のおそれが高い地域については、積極的な防除または分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 日本の侵略的外来種ワースト100 (IUCN)。 	指定時と状況は変わっていないため、今後も引き続き指摘の適否を検討することが適当。ほぼ全国に定着し、現在も分布を拡大している。	意図的導入	陸生
オオバタクサ	<i>Ambrosia trifida</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）	<ul style="list-style-type: none"> 河川敷等でみられる大型の一年生草本で、河原の固有種を含む在来種との競合や駆逐のおそれがあることから、各地で駆除が実施されている。 意図的導入が行われていないので、規制による効果は小さい。既に広範囲に蔓延しているため指定の緊急性は低い。 既に各地の河川敷や荒地等で野生化しているが、希少種等との競合・駆逐のおそれが高い地域については、積極的な防除または分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 日本の侵略的外来種ワースト100 (IUCN)。 	指定時と状況は変わっていないため、今後も引き続き指摘の適否を検討することが適当。ほぼ全国に定着し、現在も分布を拡大している。	非意図的	混入等

要注意外来生物リスト（被害に係る知見が不足しており、引き続き情報の集積に努める外来生物）

哺乳類

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状
リスサウル	<i>Saimiri sciureus</i>	生態系（競合・駆逐）	伊豆大島で野外で個体が高頻度で確認されるなど目撃例は多いが、生態系に対する影響については不明確な点が多い。飼育者は飼育施設からの逸出を防ぐ必要がある。	現在も販売、利用されているが、感染症予防法の改正により、平成17（2005）年7月1日から霊長類全種の愛玩目的での輸入は禁止されている。 被害知見の集積は進んでいない。
フェレット	<i>Mustela furo</i>	生態系（競合・駆逐、捕食）	海外では、野生化した個体による鳥類の卵・雛などの捕食が報告されており、愛玩飼養を禁止している国もある。我が国への輸入個体は、ほとんどが去勢・不妊、臭腺除去手術が施されている。去勢、不妊を確実に実施している個体を飼育するよう配慮すべきであり、飼養に当たっては、野外への遺棄、逸出逸出等がないよう十分注意して管理すべきである。	現在も販売、利用されているが、感染症予防法の改正後に、動物由来感染症対策が整備され、平成17（2005）年9月1日から海外からの輸入に関しては、届出書の提出および輸出国政府機関発行の衛生証明書の添付が義務づけられるようになった。 被害知見の集積は進んでいない。
シマリス	<i>Tamias sibiricus</i>	生態系（競合・駆逐、遺伝的攪乱）	エゾリスとの交雑が懸念されているが、交雑のおそれに関する知見が不足している。 大量にペットとして利用されており、定着すれば在来生物相に影響を与える可能性があるため、飼養に当たっては、野外への遺棄、逸出等がないよう十分注意して管理すべきである。特に北海道ではエゾシマリスとの交雑が懸念されるために、特に注意する必要があるため、安易な飼養はすべきでない。	現在も販売、利用されているが、感染症予防法の改正後に、動物由来感染症対策が整備され、平成17（2005）年9月1日から海外からの輸入に関しては、届出書の提出および輸出国政府機関発行の衛生証明書の添付が義務づけられるようになった。 被害知見の集積は進んでいない。

参考：国立感染症研究所感染症情報センターHP (<http://idsc.nih.go.jp/iasr/26/306/dj3062.html>)

鳥類

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状
シジュウカラガン 大型亜種	<i>Branta canadensis moffiti</i>	生態系（遺伝的攪乱）	ニュージーランド、ヨーロッパに移入されて増えているオオカナダガン（ <i>Branta canadensis moffiti</i> ）である可能性の高い、別亜種が定着しており、在来亜種との交雑の可能性がある。在来の亜種に対する影響を考慮し、これ以上放鳥すべきでない。	全国で40ヶ所60個体程度が生息しており、山梨県河口湖、神奈川県丹沢湖、茨城県牛久沼などで繁殖が確認されている。感染症予防法の改正後に、動物由来感染症対策が整備され、平成17（2005）年9月1日から海外からの輸入に関しては、届出書の提出および輸出国政府機関発行の衛生証明書の添付が義務づけられるようになっている。 2007年11月、丹沢湖から約30kmほどの距離にある神奈川県相模原市にて野生由来のシジュウカラガンが確認され、交雑のおそれが現実味をおびた。そのため、2010年2月に神奈川県丹沢湖周辺に生息する個体の捕獲が、横浜市動物園等からなる捕獲チームによって実施され9羽が捕獲され、そのうち7羽は動物園に収容（終生飼育）され、2羽は行動を見るために足輪を付けた上で放鳥された。 被害知見の集積は進んでいない。
コリンウスズラ	<i>Colinus virginianus</i>	生態系（捕食）	原産地のアメリカでは森林から草原まで、様々な環境に生息しており、日本でも一部の地域で定着しているが、生態系への具体的影響については不明な点が多い。逸出すれば再捕獲も困難であるので、新たな飼育は慎重に対応すべきである。	狩猟犬訓練用に放鳥された個体が野生化したとされる。大阪府や神奈川県相模川河川敷、埼玉県利根川河川敷などで確認されており、定着している可能性もある。感染症予防法の改正後に、動物由来感染症対策が整備され、平成17（2005）年9月1日から海外からの輸入に関しては、届出書の提出および輸出国政府機関発行の衛生証明書の添付が義務づけられるようになっている。 被害知見の集積は進んでいない。
クオエリセイタカシギ	<i>Himantopus himantopus mexicanus</i>	生態系（遺伝的攪乱）	我が国に人為的に放鳥された個体群が定着しており、絶滅危惧I B類（EN）となっている在来のセイタカシギ亜種との交雑による遺伝的攪乱の影響は大きいと懸念されるが、定着の実態や影響の程度に関する知見は不足している。本亜種は動物園等で飼育されている個体数も多いので、逸出が起きないように飼育者は注意すべきである。	感染症予防法の改正後に、動物由来感染症対策が整備され、平成17（2005）年9月1日から海外からの輸入に関しては、届出書の提出および輸出国政府機関発行の衛生証明書の添付が義務づけられるようになっている。 被害知見の集積は進んでいない。
シリアカヒヨトリ	<i>Pycnonotus cafer</i>	生態系（競争・駆逐）、農林水産業	海外で農林業への被害が報告されているが、本種が国内で影響を及ぼすおそれとその程度の評価に当たっては、更なる情報の集積が必要である。ペット目的などでの安易な飼育には十分注意すべきである。 世界の侵略的外来種ワースト100（IUCN）。	感染症予防法の改正後に、動物由来感染症対策が整備され、平成17（2005）年9月1日から海外からの輸入に関しては、届出書の提出および輸出国政府機関発行の衛生証明書の添付が義務づけられるようになっている。 本種は未定着。 被害知見の集積は進んでいない。
外国産メジロ （ハイパラムシメジロ、ヒメメジロなど）*	<i>Zosterops palpebrosus</i> , <i>Z. japonicus simplex</i> など	生態系（遺伝的攪乱、競争・駆逐）	野生化すれば、近縁種および亜種間で交雑が起こり、遺伝的攪乱を招く可能性が高いと思われるが、交雑の事例が確認されていない。 優占種になることにより、似た資源を利用する在来の競争種への影響が懸念される。 外国産及び在来のメジロについては、鳥獣保護法により輸入や飼養が規制されている。 2011年に実施された鳥獣保護法の基本方針の改正により、2012年4月より在来メジロの愛玩飼養は原則禁止されることとなった。	感染症予防法の改正後に、動物由来感染症対策が整備され、平成17（2005）年9月1日から海外からの輸入に関しては、届出書の提出および輸出国政府機関発行の衛生証明書の添付が義務づけられるようになっている。 被害知見の集積は進んでいない。

* *Z. japonicus*の亜種、ヒメメジロ（*Z. japonicus simplex*）、ハイナンメジロ（*Z. j. hainanus*）キクチメジロ（*Z. j. batansis*）、フィリピンメジロ（*Z. j. meyeri*）を含む。
在来メジロ（*Z. j. japonicus*、*Z. j. steunegeri*、*Z. j. alani*、*Z. j. insularis*、*Z. j. loochooensis*、*Z. j. daitoensis*）は除く

参考：国立感染症研究所感染症情報センターHP（<http://idsc.nih.go.jp/iasr/26/306/dj3062.html>）
財団法人自然環境研究センター（編）．2008．決定版日本の外来生物．平凡社．

爬虫類

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状
ワニガメ	<i>Macroclemys temmincki</i>	人の生命、身体に係る被害	カミツキガメと同様に危険動物に指定されており、咬みつきによる身体への被害が心配されるものの、国内での被害のおそれは明らかでない。 都市部を中心に遺棄されている可能性がある。 販売、飼育にあたっては、長生きすること、大型になることや危険性等を十分理解し、飼い主が責任を持って飼育することを確認する必要がある。	平成18年に動物愛護管理法の定める特定動物に指定され、飼育に許可が必要になった。現在もペットとして流通している。国内でも野外で発見されることがまれにあるが、国内分布、生態系等への被害に関しては依然として不明な点が多い。 (環境省HP http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/index.html) 佐賀県では条例で移入規制種に指定し、野外へ放すことを禁止している(2006年4月1日施行)。 滋賀県では条例で指定外来種に指定し、飼育者に対し届け出を義務づけるとともに、野外へ放すことを禁止している(2007年5月1日指定)。 愛知県では条例で条例公表種に指定し、野外へ放すことを禁止している(2010年6月30日指定)。 被害知見の集積は進んでいない。
チュウゴクスッポン	<i>Polodiscus sinensis sinensis</i>	生態系(競合・駆逐、遺伝的攪乱)	沖縄等に定着している。在来のスッポンとの交雑や競合のおそれがある。 食用として利用する場合は、遺棄することがないように、適切な管理を行なうことが重要である。 これ以上の分布拡大を防ぐために、定着している水系等から他水域へと不用意な移植が起こらないようにすべき。	野外に定着個体群を形成しているが(沖縄県)、それ以外の地域での国内分布及び生態系等への被害、利用状況に関しては依然として不明な点が多い。 (財団法人自然環境研究センター(編). 2008. 決定版日本の外来生物. 平凡社.) 被害知見の集積は進んでいない。
アメリカスッポン属全種	<i>Apalone spp.</i>	生態系(競合・駆逐、捕食)	<i>A. spinifera</i> は、アメリカ東部原産ながら、西海岸などにも定着。国内では、やや多く流通しており、温帯に産するため逸走個体が定着するおそれがある。 被害の実態については不明であるが、定着すれば在来種への影響が懸念される。 販売、飼育にあたっては、長生きすること、大型になることや危険性等を十分理解し、飼い主が責任を持って飼育することを確認する必要がある。	現在も、ペットとして流通している。 被害知見の集積は進んでいない。
クラーガメ(アカハカメ)属全種	<i>Pseudemys spp.</i>	生態系(競合・駆逐、捕食)	生態がミシシippアカミミガメと同様で、やや多く流通しており、逸出個体がしばしば見つかる。定着してミシシippアカミミガメと同様の生態系影響を引き起こす懸念がある。 販売、飼育にあたっては、長生きすること、大型になること等を十分理解し、飼い主が責任を持って飼育することを確認する必要がある。	現在も、ペットとして流通している。 被害知見の集積は進んでいない。
チズガメ属の3種	<i>Graptemys spp.</i>	生態系(競合・駆逐、捕食)	ニセチズガメ <i>Graptemys pseudogeographica</i> 、フトマコチズガメ <i>G. ouachitensis</i> (サビンチズガメ <i>G. o. sabinensis</i> を含む)、ミシシippチズガメ <i>G. kohnii</i> の3種。生態がミシシippアカミミガメとやや類似しており、また流通しており逸走個体が稀に野外で見つかる。定着してミシシippアカミミガメと同様の生態系影響を引き起こす懸念がある。 販売、飼育にあたっては、長生きすること、大型になること等を十分理解し、飼い主が責任を持って飼育することを確認する必要がある。	現在も、ペットとして流通している。 被害知見の集積は進んでいない。

爬虫類

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状
ハカメ	<i>Ocadia sinensis</i>	生態系（競争・駆逐、捕食、遺伝的攪乱）	逸出個体がしばしば見つかるが、亜熱帯に分布し、南日本では定着のおそれがある。飼育下でハカメとの交雑と思われる例があり、野外でも在来種との交雑のおそれがある。販売、飼育にあたっては、長生きすること、大型になること等を十分理解し、飼い主が責任を持って飼育することを確認する必要がある。	現在も、ペットとして流通している。被害知見の集積は進んでいない。
ヒョウモンカゲモドキ	<i>Eublepharis macularius</i>	生態系（野生動物への病原体蔓延）	寄生性の原虫クリプトスポリジウム <i>Cryptosporidium</i> sp. に高い割合で感染しており、さまざまな野生爬虫類への媒介、蔓延が懸念される。この原虫は徳之島に生息する希少種オビトカゲモドキに対して致死性的であり、致死率はきわめて高いことが知られる。本種を含むペット爬虫類は、在来動物への感染症等を伝播する危険性があることに留意すべきである。	現在も、ペットとして流通しており、流通量も多い。被害知見の集積は進んでいない。
グリーンイグアナ	<i>Iguana iguana</i>	生態系（競争・植生破壊）	大量に取り引きされるが、きわめて大型になり持て余されやすく、遺棄された個体が頻りに報告される。特に定着の可能性がある八重山諸島などでは、流通量を増やさないうように安易な販売、飼養は控えることが望ましい。	現在も、ペットとして流通している。野外に定着個体群を形成しており（石垣島）、環境省が駆除事業を実施している。（平成21年度沖縄県下の外来爬虫両生類対策専門家会議資料）被害知見の集積は進んでいない。

両生類

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状
アフリカツメガエル	<i>Xenopus laevis</i>	生態系（競合・駆逐・捕食）	実験用等として、大量に利用されており、野外で確認されることがあるが、定着や被害の実態に関する知見が不足している。実験に利用する場合は、遺棄することがないように、適切な管理を行なうことが重要である。	現在も、実験動物として養殖され流通量も多い。野外に定着個体群を形成しているが（千葉県、静岡県、和歌山県）、それ以外の地域での国内分布及び生態系等への被害、利用状況に関しては依然として不明な点が多い。両生類大量死を引き起こすことが心配されるカエルツボカビへの感染率が高いことが分かっている。（財団法人自然環境研究センター（編）. 2008. 決定版日本の外来生物. 平凡社.） （国領康宏. 2009. 静岡県のアフリカツメガエルの生息調査. 爬虫両棲類学会報. 2009(2).） （環境省自然環境局野生生物課. 2009. 平成20年度カエルツボカビ実態把握調査検討業務報告書） 利根川の個体群の食性についての知見が得られている。（光岡ほか2010）
ヒキガエル属の5種	<i>Bufo</i> spp.	生態系（競合・駆逐・捕食）	ヨーロッパミドリヒキガエル <i>Bufo viridis</i> 、テキサスマドリヒキガエル <i>Bufo debilis</i> 、ナンブヒキガエル <i>Bufo terrestris</i> 、ガルフコーストヒキガエル <i>Bufo valliceps</i> 、ロココヒキガエル（キャハンヒキガエル） <i>Bufo paracnemis</i> の5種。日本においてヒキガエル属が外来種となっている例は多い。これらの種はヒキガエル属の中でも輸入が比較的多く、主として温帯に分布する。飼育に当たっては、逸出のないよう十分に留意し、飼い主が責任を持って飼育する必要がある。	現在も、ペットとして流通している。被害知見の集積は進んでいない。

魚類

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状
ソウキョウ	<i>Ctenopharyngodon idellus</i>	生態系（環境攪乱）	食用目的で導入され、最近では釣りや水草除去のために堀や湖沼に放流されているが、繁殖が可能な水域は広大な下流域を有する利根川水系等に限定されるため、これ以上の分布拡大の可能性は低い。ただし、過剰に放流された水域では、在来植物群落を壊滅させる事例もあり、安易な放流を行わないよう注意が必要。 日本の侵略的外来種ワースト100（IUCN）。	指定時と状況は変わっていない。水草が激減している水域が多いなどの知見がある（松沢・瀬能, 2008）。
アサギ	<i>Mylopharyngodon piceus</i>	生態系（競合・駆逐）	食用目的で導入され、いくつかの水系で生息が確認されているが、繁殖が可能な水域は広大な下流域を有する利根川水系等に限定されるため、これ以上の分布拡大の可能性は低い。ただし、生態系に影響を与える可能性が指摘されていることに留意し、飼養等に当たっては適切な管理を行なうことが重要。	指定時と状況は変わっていない。被害知見の集積は進んでいない。

魚類

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状
オオカナゴ	<i>Acheilognathus macropterus</i>	生態系（競合・駆逐）	近年、霞ヶ浦を含む利根川水系で定着・急増し、在来のタナゴ類を駆逐しているおそれが指摘されているが、被害の実態は不明。早急に知見の集積に努めるとともに、これ以上の分布拡大が起こることがないように、適切な管理を行なうことが重要。	以前は霞ヶ浦南部で主に確認されていたが、その後分布を拡大しており、霞ヶ浦全域や霞ヶ浦に近接する北浦にも広がっている。また、千葉県印旛沼、手賀沼、中川などからも確認されている。 (2010年の霞ヶ浦の外来種シンポジウム) 滋賀県では条例で指定外来種に指定し、飼育者に対し届け出を義務づけるとともに、野外へ放すことを禁止している（2007年5月1日指定）。 被害知見の集積は進んでいない。
カマトジョウ	<i>paramisgurnus dabryanus</i>	生態系（競合・駆逐）	少なくとも17県で生息が確認されており、在来のドジョウと競合する可能性が指摘されているが、被害の実態は不明である。食用として輸入されるドジョウに混入した可能性も指摘されており、不用意な遺棄や逸出がないよう適切な管理が必要。	在来のドジョウとの識別が困難であるため、分布の拡大等の実態は不明。群馬県では在来ドジョウと本種の両種が生息する場所の近くに本種だけが生息する場所があるなど、置き換わりの可能性が指摘されているなどの知見が得られている。 (群馬県HP： http://www.pref.gunma.jp/cts/PortalServlet.jsessionid=C78BAC8D9363B64ACE5252B9A5DA36DC?DISPLAY_ID=DIRECT&NEXT_DISPLAY_ID=U000004&CONTENTS_ID=67765) 愛知県では条例で条例公表種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2010年6月30日指定）。
ヨーロッパナマス	<i>Silurus glanis</i>	生態系（捕食、競合・駆逐）	観賞用として利用されているが、野外で定着した場合に生態系に影響を与える可能性があることに留意し、飼養に当たって野外への遺棄を起こすことがないように、関係業者や利用者に普及啓発を行なうことが重要。	指定時と状況は変わっていない。 滋賀県では条例で指定外来種に指定し、飼育者に対し届け出を義務づけるとともに、野外へ放すことを禁止している（2007年5月1日指定）。 被害知見の集積は進んでいない。
ウォーキングキャットフィッシュ	<i>Clarias batrachus</i>	生態系（捕食、競合・駆逐）	観賞魚として利用されているが、野外で定着した場合に生態系に影響を与える可能性があることに留意し、飼養に当たり野外への遺棄を起こすことがないように、関係業者や飼養者に普及啓発を行なうことが重要。熱帯・亜熱帯性であり、定着の可能性が想定されるのは琉球列島等のみである。 世界の侵略的外来種ワースト100（IUCN）。	沖縄島や石垣島では既に定着している。国内での被害状況は不明だが、東南アジアやアメリカ南部では捕食や競争により魚類や甲殻類、カエル類を駆逐している。養殖対象種への被害も見られるなどの知見が得られている。 (財団法人自然環境研究センター（編）. 2008. 決定版日本の外来生物. 平凡社.)
マガラホリカリア	<i>Liposarcus disjunctivus</i>	生態系（競合・駆逐）	観賞用として利用されているが、野外で定着した場合に生態系に影響を与える可能性があることに留意し、飼養に当たって野外への遺棄を起こすことがないように、関係業者や利用者に普及啓発を行なうことが重要。熱帯・亜熱帯性であり、 沖縄島の少なくとも6水系で生息が確認 されているが、被害の実態は十分には把握されていない。	指定時と状況は変わっていない。 被害知見の集積は進んでいない。
ナイルヘチ	<i>Lates niloticus</i>	生態系（捕食、競合・駆逐）	食用や観賞用として利用されているが、飼養場所からの逸出により生態系に影響を与える可能性があることに留意し、適切な管理を行なうことが重要。熱帯・亜熱帯性であり、定着の可能性が想定されるのは琉球列島等のみである。 世界の侵略的外来種ワースト100（IUCN）。	指定時と状況は変わっていない。 本種は未定着。被害知見の集積は進んでいない。

魚類

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状
タイリクスギ	<i>Lateolabrax</i> sp.	生態系（捕食、競合・駆逐）	海域で小割生け簀を使って養殖されているが、飼養場所から大量に逸出した場合は、一時的に在来種等と適度な競争関係が生じる可能性が指摘されていることに留意し、適切な管理を行なうことが重要。	指定時と状況は変わっていない。 被害知見の集積は進んでいない。
マレーコッド	<i>Maccullochella</i> <i>peelii</i>	生態系（捕食、競合・駆逐）	温帯域に生息し、繁殖力が旺盛な魚食性淡水魚であり、捕食等により在来生物相に影響をおよぼすおそれがあり、適切な管理を行うことが重要。観賞魚として利用されているが、 IUCNのレッドリストに絶滅のおそれのある種として掲載 されており、学術的な目的等を除いて輸入を慎むべきとの指摘がある。	現在は観賞魚としての入荷はほとんど無い。 本種は未定着であるが、2010年滋賀県琵琶湖で捕獲された。 被害知見の集積は進んでいない。
ゴールデソナチ	<i>Macquaria</i> <i>ambigua</i>	生態系（捕食、競合・駆逐）	温帯域に生息し、繁殖力が旺盛な魚食性淡水魚であり、捕食等により在来生物相に影響をおよぼすおそれがあり、適切な管理を行うことが重要。観賞魚として利用されているが、 IUCNのレッドリストに絶滅のおそれのある種として掲載 されており、学術的な目的等を除いて輸入を慎むべきとの指摘がある。	指定時と状況は変わっていない。 被害知見の集積は進んでいない。
ナイロティリア	<i>Oreochromis</i> <i>niloticus</i>	生態系（競合・駆逐）	食用として利用されているが、飼養場所からの逸出により、生態系に影響を与える可能性が指摘されていることに留意し、適切な管理を行なうことが重要。熱帯・亜熱帯性であり、定着の可能性が想定されるのは琉球列島や温泉地等のみである。	指定時と状況は変わっていない。 愛知県では条例で条例公表種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2010年6月30日指定）。 被害知見の集積は進んでいない。
カワスズメ	<i>Oreochromis</i> <i>mossambicus</i>	生態系（競合・駆逐）	食用として利用されているが、飼養場所からの逸出により、生態系に影響を与える可能性が指摘されていることに留意し、適切な管理を行なうことが重要。熱帯・亜熱帯性であり、定着の可能性が想定されるのは琉球列島や温泉地等のみである。 世界の侵略的外来種ワースト100 (IUCN)。	指定時と状況は変わっていない。 被害知見の集積は進んでいない。
カムルチー	<i>Channa</i> <i>argus</i>	生態系（捕食、競合・駆逐）	全国各地に定着し、霞ヶ浦等では一時的に急増したが、現在は安定期に入り、目立った被害は確認されていない。ただし、釣魚として利用されており、飼養場所からの逸出、不用意な放流等により、生態系に影響を与える可能性が指摘されていることに留意し、今後とも適切な管理を行なうことが重要。	指定時と状況は変わっていない。 被害知見の集積は進んでいない。
タイワントシヨウ	<i>Channa</i> <i>maculata</i>	生態系（捕食、競合・駆逐）	西日本を中心に定着しているが、目立った被害は確認されていない。ただし、釣魚として利用されており、飼養場所からの逸出、不用意な放流等により、生態系に影響を与える可能性が指摘されていることに留意し、今後とも適切な管理を行なうことが重要。	指定時と状況は変わっていない。 被害知見の集積は進んでいない。
コウタイ	<i>Channa</i> <i>asiatica</i>	生態系（捕食、競合・駆逐）	飼養場所からの逸出、不用意に持ち出し放流等を行うことにより、生態系に影響を与える可能性が指摘されていることに留意し、適切な管理を行なうことが重要。	指定時と状況は変わっていない。 被害知見の集積は進んでいない。

昆虫類

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状
クワガタムシ科	Lucanidae	生態系（競合・駆逐、遺伝的攪乱）	大量の個体が愛玩用に輸入・販売され、一般家庭にも浸透しており、低年齢層の飼育者も多い。 野外での逸出個体の発見があり、遺伝的攪乱も懸念されるが、実証的データは不足している。 野外で確認される個体は遺棄か逸出によるものである可能性が高く、飼育に関するマナーの向上が特に重要であり、安易な飼育・購入等による遺棄が生じないよう販売に係る事業者等を中心に、適正な飼育に関する普及啓発を飼育者に対し積極的に進めていく必要がある。	一時期のブームは下火となったが、財務省貿易統計資料によると現在も昆虫類（クワガタムシ以外のものも含む）の輸入量は6500万～7500万個体と高い値で推移しており、クワガタムシ科もペット用に多くの個体が輸入されているものと考えられる。 財務省貿易統計HP (http://www.customs.go.jp/tariff/2010_4/index.htm) ヒラタクワガタなどでは容易に外国産亜種と交雑し、実際に野外において外国産亜種の遺伝子を持つ個体が発見されているなどの知見があるものの（五箇・小島，2003；荒谷，2010）、被害知見の集積は進んでいない。 愛知県では条例で条例公表種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2011年3月30日指定）。
オキナワシロテンハナムグリ	<i>Protaetia orientalis sakaii</i>	生態系（競合・駆逐、遺伝的攪乱）	在来種との交雑については、確からしい証拠が発見されたばかりで、より詳細な検討が必要。 沖縄島の平地では在来種をしのぐ優占種となっており、競合による影響が懸念される。 国内への侵入および各島への伝播は樹木の導入により、土中の幼虫が持ちこまれた可能性が高く、土の移動に注意が必要である。	沖縄島では在来種のリュウキュウオオハナムグリ <i>P. lewisii</i> との交雑個体やオキナワシロテンハナムグリ <i>P. ishigakia</i> との交雑個体と推測される中間的な個体も複数発見されるなどの知見が得られている（野林，2006；高宮城・野林，2008）。
チャイロネツタイズバチ	<i>Delta pyriforme</i>	生態系（競合・駆逐・捕食）	大型の捕食者で小笠原で普通種となっており、在来の昆虫（特にチョウ目）への影響が懸念されるが、実態は不明。 小笠原の周辺島嶼に分布が拡大しないよう監視できる体制を構築することが望ましい。	父島、兄島、弟島に加え2009年に聳島列島聳島及び媒島で定着が確認され、分布が拡大した。生態としては、幼虫の餌とするために、ヤガ科、シヤクガ科の種の幼虫が捕獲されていることが知られているものの、詳細な調査は実施されておらず被害知見の集積は進んでいない。
ナンヨウチビアザバチ	<i>Ropalinda marginata</i>	生態系（競合・駆逐・捕食）	硫黄島では普通種で、捕食による在来昆虫への影響が懸念されるが、実態は不明。 小笠原に侵入しないよう監視できる体制を構築することが望ましい。被害に係る知見の充実と硫黄島における防除手法の検討が望まれる。	指定時と状況は変わっていない。 被害知見の集積は進んでいない。
アフリカミツバチとその交雑個体群（アフリカ化ミツバチ）	<i>Apis mellifera scutellata</i>	生態系（競合・駆逐）、人の生命・身体に係る被害	海外において、本亜種とヨーロッパ系ミツバチとの交雑個体（アフリカ化ミツバチ）が高い攻撃性を持つことが知られているが、日本における被害のおそれは不明。 本亜種の養蜂目的での輸入はないと考えられるが、今後とも予防的観点からもアフリカ産の8亜種のうち本亜種又は本亜種の交雑個体の安易な輸入がなされぬよう注意が必要。	指定時と状況は変わっていない。 被害知見の集積は進んでいない。

参考：財団法人自然環境研究センター（編）．2008．決定版日本の外来生物．平凡社．

無脊椎動物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状
タテシマフシツボ	<i>Balanus amphitrite</i>	生態系（競合・駆逐）	在来種と競合し、減少させた可能性がある。国内での被害の知見は明確でないが、バラスト水等の適切な管理に注意が必要。	指定時と状況は変わっていない。 愛知県では条例で条例公表種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2012年3月29日指定）。 被害知見の集積は進んでいない。
チチュウカイミドリガニ	<i>Carcinus aestuarii</i>	生態系（捕食）	在来種との競合の可能性がある。国内での被害の知見は明確でないが、既に分布を拡大中の外来生物であり、バラスト水等の管理などにて分布拡大を防ぐことが必要。 日本の侵略的外来種ワースト100（IUCN）。	指定時と状況は変わっていない。 愛知県では条例で条例公表種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2012年3月29日指定）。 被害知見の集積は進んでいない。
ヨーロッパミドリガニ	<i>Carcinus maenas</i>	生態系（捕食）、農林水産業	国内では未定着であるが、諸外国では水産業への被害や在来生物への捕食など多大な被害を与えている。 世界の侵略的外来種ワースト100（IUCN）。	指定時と状況は変わっていない。 被害知見の集積は進んでいない。
カラムシ	<i>Nassarius sinarus</i>	生態系（競合）、農林水産業	有明海においてハゼ漁などに多大な被害を与えている。水産資源（アゲマキなど）の輸入の際に混入するので、水産資源の輸入の際には注意が必要。	指定時と状況は変わっていない。 被害知見の集積は進んでいない。
ゴロンエンカワヒバリガイ	<i>Xenostrobus securis</i>	生態系（競合）、農林水産業	既に広範囲に分布しており、防除は困難であるが、大量発生時の汚損被害等に注意が必要。 日本の侵略的外来種ワースト100（IUCN）。	指定時と状況は変わっていない。 被害知見の集積は進んでいない。
イカイダマシ	<i>Mytilopsis sallei</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）	インドでは船舶・取水施設への汚損被害を与えている。日本でも分布を広げており、在来付着生物との競合が懸念されている。国内での被害の知見は明確でないが、今後はバラスト水等の適切な管理に注意が必要。	指定時と状況は変わっていない。 被害知見の集積は進んでいない。
タイワンシジミ種群	<i>Corbicula fluminea</i>	生態系（競合・駆逐・遺伝的攪乱）	アメリカの河川で大繁殖し、取水施設の通水障害や在来二枚貝の生息を圧迫する等の被害を引き起こしている。国内での被害の知見は明確でないが、日本各地で分布を拡大中の外来生物であり、さらに輸入シジミには、カワヒバリガイ等の生態系に被害を及ぼす他の淡水産外来生物が混入して外来生物の移入経路になっていることから、輸入シジミ類の取り扱いについては、混入を回避するよう利用関係者による十分な注意が必要である。	指定時と状況は変わっていない。 被害知見の集積は進んでいない。
シハマガリ	<i>Meretrix petechialis</i>	生態系（遺伝的攪乱）	国内での被害の知見は明確でないが、蓄養・放流時には拡散防止の注意が必要。 日本の侵略的外来種ワースト100（IUCN）。	指定時と状況は変わっていない。 被害知見の集積は進んでいない。
カニヤトリカンザシ	<i>Ficopomatus enigmaticus</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）、農林水産業	ヨーロッパでは取水障害などの被害を与えている。国内での被害の知見は明確でないが、バラスト水等の適切な管理に注意が必要。	指定時と状況は変わっていない。 被害知見の集積は進んでいない。
ムネミヅシスレイテイ（ツルクケの一種）	<i>Mnemiopsis leidyi</i>	生態系（捕食・競合）	黒海では、捕食によりプランクトンの群集構造に影響を及ぼし、プランクトン食の魚類の減少を引き起こした。バラスト水の適切な管理に注意が必要。 世界の侵略的外来種ワースト100（IUCN）。	指定時と状況は変わっていない。 被害知見の集積は進んでいない。

植物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注外来生物選定当時の摘要	現状	導入・利用の形態	
オオサンショウモ	<i>Salvinia molesta</i>	生態系(競合・駆逐、遺伝的攪乱)、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> 一部の地域で野生化がみられることから、絶滅危惧種のサンショウモとの競合・駆逐や、遺伝的攪乱のおそれがある。 観賞用の水草として利用されているので、今後も分布が拡大するおそれがある。 海外では、水田雑草となったり、養魚場の害草になっている。 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。 関係業者や利用者は、責任を持って栽培し、栽培できなくなった場合は野外へ遺棄することなく、適切な処分を行うことが必要である。 	指定時と状況は変わっていない。現在も、販売、利用されている。定着、分布拡大したとの情報は無い。 被害知見の集積は進んでいない。	意図的導入	水草
ハコノモ	<i>Cabomba caroliniana</i>	生態系(競合・駆逐)	<ul style="list-style-type: none"> 本州以南の各地で野生化しており、場所によっては大群落をつくるので、在来の水草と競合・駆逐のおそれがある。 金魚藻の名で親しまれ、大量に利用されていることから、今後も分布を拡大するおそれがある。 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。 関係業者や利用者は、責任を持って栽培し、栽培できなくなった場合は野外へ遺棄することなく、適切な処分を行うことが必要である。 	指定時と状況は変わっていない。本州以南に分布する。現在も、販売、利用されている。 愛知県では条例で条例公表種に指定し、野外へ放すことを禁止している(2010年6月30日指定)。 被害知見の集積は進んでいない。	意図的導入	水草
アメリカスユキシク	<i>Ludwigia repens</i>	生態系(競合・駆逐)	<ul style="list-style-type: none"> 天然記念物の深泥池で増加しており、在来種との競合・駆逐のおそれが大きい。 観賞用の水草として利用されているので、今後も分布を拡大するおそれがある。 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。 関係業者や利用者は、責任を持って栽培し、栽培できなくなった場合は野外へ遺棄することなく、適切な処分を行うことが必要である。 	指定時と状況は変わっていない。京都市の深泥池に生育する。現在も、販売、利用されている。分布を拡大しているとの情報は無い。 被害知見の集積は進んでいない。	意図的導入	水草
オトメアザミ	<i>Bacopa monnieri</i>	生態系(競合・駆逐)、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> 海外では水田や水路の雑草となっており、日本に侵入すれば在来の水草と競合するおそれがある。 丈夫で育成が容易な水草として観賞用に販売されているので、定着する可能性がある。 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。 関係業者や利用者は、責任を持って栽培し、栽培できなくなった場合は野外へ遺棄することなく、適切な処分を行うことが必要である。 	指定時と状況は変わっていない。現在も、販売、利用されている。定着、分布拡大したとの情報は無い。 被害知見の集積は進んでいない。	意図的導入	水草

植物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注外来生物選定当時の摘要	現状	導入・利用の形態	
ハナカガブタ	<i>Nymphoides aquatica</i>	生態系（競合・駆逐）	<ul style="list-style-type: none"> 一部の地域で野生化がみられることから、近縁の絶滅危惧種との競合・駆逐や、遺伝的攪乱のおそれがある。 観賞用の水草として利用されているので、今後も分布が拡大するおそれがある。 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。 関係業者や利用者は、責任を持って栽培し、栽培できなくなった場合は野外へ遺棄することなく、適切な処分を行うことが必要である。 	指定時と状況は変わっていない。現在も、販売、利用されている。定着、分布拡大したとの情報は無い。被害知見の集積は進んでいない。	意図的導入	水草
ナカバオモダカ	<i>Sagittaria graminea</i>	生態系（競合・駆逐）	<ul style="list-style-type: none"> 天然記念物の深泥池での大繁殖が確認された他、各地で野生化しており、在来水草との競合・駆逐のおそれが大きい。 観賞用の水草として利用されているので、今後も分布を拡大するおそれがある。 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。 関係業者や利用者は、責任を持って栽培し、栽培できなくなった場合は野外へ遺棄することなく、適切な処分を行うことが必要である。 	指定時と状況は変わっていないか、分布を拡大している可能性がある。現在も、販売、利用されている。 愛知県では条例で条例公表種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2010年6月30日指定）。被害知見の集積は進んでいない。	意図的導入	水草
キョウブ	<i>Iris pseudoacorus</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> 繁殖力が強く、海外では水路等の雑草になっており、日本でも水辺の在来種と競合・駆逐のおそれがある。 近縁種に絶滅危惧種が含まれ、それらの遺伝的攪乱のおそれがある。 美しい花が親しまれ、観賞用に栽培されることが多いため、分布を拡大するおそれが大きい。 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。 関係業者や利用者は、責任を持って栽培し、栽培できなくなった場合は野外へ遺棄することなく、適切な処分を行うことが必要である。 ビオトープ創出等を目的とした水草の利用には、在来種を利用することが望まれる。 	指定時と状況は変わっていないか、分布を拡大している可能性がある。全国に分布する。現在も、販売、利用されている。 佐賀県では条例で移入規制種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2006年4月1日施行）。 愛知県では条例で条例公表種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2010年6月30日指定）。被害知見の集積は進んでいない。	意図的導入	水草
チョウセンサカオ属	<i>Datura sp.</i>	農林水産業、人の生命又は身体	<ul style="list-style-type: none"> 園芸品種を含む様々な種類が販売、栽培されているが、毒性を持つことへの認知が低く、誤食による中毒事例が発生している。 植物体全体に有毒成分を含み、中毒事例も多数あるので、誤って食べることのないよう、注意が必要である。 植物防疫法により、指定地域からのナス科植物の輸入は禁止されている。 	指定時と状況は変わっていない。現在も、販売、利用されている。被害知見の集積は進んでいない。	意図的導入	陸生

植物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状	導入・利用の形態	
ムラサキカハハミ	<i>Oxalis corymbosa</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> ・繁殖力が強く、畑地では難防除の雑草となっており、在来種と競合するおそれがある。 ・花が美しいので観賞用に植えられることがある。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。 	指定時と状況は変わっていない。本州以南でみられる。現在も、販売、利用されている。被害知見の集積は進んでいない。	意図的導入	陸生
ネハリノキク	<i>Aster novae-angliae</i>	生態系（競合・駆逐）	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の侵略的外来種の一つとされている。 ・観賞用に栽培されることがある。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。 	指定時と状況は変わっていないか、北海道などで分布を広げている可能性がある。現在も、販売、利用されている。被害知見の集積は進んでいない。	意図的導入	陸生
チヂアキセンカンクサ	<i>Bidens pilosa</i> var. <i>radiata</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の侵略的外来種の一つとされ、沖縄本島では畑雑草になっている。 ・観賞用に栽培されることがある。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。 	指定時と状況は変わっていない。南西諸島に広くみられる。被害知見の集積は進んでいない。	意図的導入	陸生
ハルシオン	<i>Erigeron philadelphicus</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> ・繁殖力や定着力が強く除草剤耐性型があるため、畑地の強害雑草となっており、在来種との競合・駆逐のおそれがある。 ・既に広く野生化しているが、希少種等との競合・駆逐等のおそれがある地域については、積極的な防除または分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 	指定時と状況は変わっていない。全国に広くみられる。被害知見の集積は進んでいない。	意図的導入	陸生
オアワガチソウ	<i>Solidago gigantea</i> var. <i>leiophylla</i>	生態系（競合・駆逐）	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の侵略的外来種の一つとされている。 ・既に広く野生化しているが、希少種等との競合・駆逐等のおそれがある地域については、積極的な防除または分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 	指定時と状況は変わっていない。北海道を中心に全国に広くみられる。被害知見の集積は進んでいない。	意図的導入	陸生
ヒメシオン	<i>Stenactis annuus</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> ・繁殖力が強く、亜高山帯等の自然性の高い環境にも侵入し、在来植物と競合のおそれがあるため、駆除が実施されている。 ・除草剤耐性型がある等、農耕地でも難防除の雑草となっている。 ・既に広く野生化しているが、希少種等との競合・駆逐等のおそれがある地域については、積極的な防除または分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 	指定時と状況は変わっていない。全国に広くみられる。被害知見の集積は進んでいない。	意図的導入	陸生
ハカクヲクサ	<i>Tradescantia fluminensis</i>	生態系（競合・駆逐）	<ul style="list-style-type: none"> ・日陰地や水辺に侵入して群落を形成するので、林床や水辺に生育する在来種と競合・駆逐するおそれが大きい。 ・近年も分布を拡大中で、観賞用に栽培されていることから、分布を拡大するおそれが大きい。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。 	指定時と状況は変わっていないか、暖地を中心に分布を広げている可能性がある。現在も、販売、利用されている。 愛知県では条例で条例公表種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2011年3月30日指定）。被害知見の集積は進んでいない。	意図的導入	陸生

植物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状	導入・利用の形態	
キクイモ	<i>Helianthus tuberosus</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> 各地の河川敷や農耕地等でみられ、河川敷固有の在来種等と競合・駆逐のおそれがある。 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。 既に広く野生化しているが、希少種等との競合・駆逐等のおそれがある地域については、積極的な防除または分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 	指定時と状況は変わっていない。全国に広くみられる。被害知見の集積は進んでいない。	意図的導入	その他
外来タンポポ種群	<i>Taraxacum spp.</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱、遺伝的攪乱）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> 繁殖力が強く、亜高山帯等の自然性の高い環境にも侵入し、在来種との競合のおそれがある。 在来種との雑種が全国的にみられ、遺伝的攪乱が既に広く起こっている。 既に広く野生化しているが、希少種等との競合・駆逐等のおそれがある地域については、積極的な防除または分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 	指定時と状況は変わっていない。全国に広くみられる。被害知見の集積は進んでいない。	意図的導入	その他
オランダガラシ	<i>Nasturtium officinale</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> 繁殖力が強く清水域に生育するため、そうした環境に特異的な希少種への競合・駆逐のおそれが大きい。 食用として広く利用され、栽培されていることから、今後も分布を拡大するおそれがある。 栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。 関係業者や利用者は、責任を持って栽培し、栽培できなくなった場合は野外へ遺棄することなく、適切な処分を行うことが必要である。 既に各地の湖沼等で野生化しており、在来種との競合・駆逐等のおそれがあるため、積極的な防除または分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 湖沼の水質浄化等を目的とした水草の利用には、在来種を利用することが望まれる。 	指定時と状況は変わっていないか、各地で分布を広げている可能性がある。現在も、販売、利用されている。被害知見の集積は進んでいない。	意図的導入	その他
ハリビユ	<i>Amaranthus spinosus</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> 鋭い棘を持つ大型の一年生草本で、牧草地や飼料畑に侵入して家畜への有害植物になっている。 侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 	指定時と状況は変わっていない。暖地を中心に広くみられる。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
イビ	<i>Abutilon theophrasti</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> 畑作物や牧草と競合するとともに、飼料に混入すると牛乳が異常風味になる。また、表皮が丈夫な繊維質で容易に切れない植物なので、作物に混入すると収穫の妨げになるなどで、強害雑草とされている。 侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 	指定時と状況は変わっていない。全国に広くみられる。滋賀県では条例で指定外来種に指定し、飼育者に対し届け出を義務づけるとともに、野外へ放すことを禁止している（2007年5月1日指定）。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等

植物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状	導入・利用の形態	
エゾノギンギン	<i>Rumex obtusifolius</i> <i>var. agrestis</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> ・繁殖力が強く、亜高山帯等の自然性の高い環境にも侵入し、在来植物への競合・駆逐のおそれがあるため、駆除が実施されている。 ・農耕地の強害雑草として防除が行われている。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 ・既に各地で野生化しているが、希少種等との競合・駆逐等のおそれがある地域については、積極的な防除または分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 	指定時と状況は変わっていない。全国に広くみられる。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
ハルサキヤマガラシ	<i>Barbarea vulgaris</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> ・繁殖力が強く、亜高山帯等の自然性の高い環境等にも侵入し、在来植物への競合・駆逐のおそれがあるため、駆除が実施されている。 ・農耕地の雑草であり、近年も分布を拡大している。 ・非意図的導入については、侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 ・既に各地で定着しており、希少種等との競合・駆逐等のおそれがある場合には、積極的な防除または分布拡大の検討が望まれる。 	指定時と状況は変わっていないか、分布を拡大している可能性がある。全国に分布する。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
トクニンジン	<i>Conium maculatum</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> ・有毒成分を含み、牧草地の周辺に生育することから、牛等の家畜に有害な植物である。 ・植物体全体に有毒成分を含むので、牧草地や草食動物に影響を及ぼすおそれのある場所では、積極的な防除または分布拡大の検討が望まれる。 	指定時と状況は変わっていない。北海道と本州の一部に分布する。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
メマツヨイクサ	<i>Oenothera biennis</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> ・亜高山帯や砂丘等にも侵入し、在来種との競合のおそれがあるとして問題になっている。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 	指定時と状況は変わっていない。全国に広くみられる。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
コマツヨイクサ	<i>Oenothera laciniata</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）	<ul style="list-style-type: none"> ・河川敷や砂丘に侵入するため、そうした環境に特異的な在来植物への競合・駆逐のおそれがある。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 	指定時と状況は変わっていないか、河原や砂浜などで分布を拡大している可能性がある。本州以南に分布する。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
ワルナスビ	<i>Solanum carolinens</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> ・鋭い棘を持つ多年生草本で、牧草地や飼料畑に侵入して家畜への有害植物になっている。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 ・植物防疫法により、指定地域からのナス科植物の輸入は禁止されている。 	指定時と状況は変わっていない。全国に広くみられる。滋賀県では条例で指定外来種に指定し、飼育者に対し届け出を義務づけるとともに、野外へ放すことを禁止している（2007年5月1日指定）。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等

植物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状	導入・利用の形態	
ヤセウツボ	<i>Orobanche minor</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> 多様な植物に寄生するので、在来種や牧草の生育を抑制するおそれがある。 現在も分布を拡大しつつある。 侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 	指定時と状況は変わっていないか、分布を拡大している可能性がある。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
ハラオホバコ	<i>Plantago lanceolata</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> 繁殖力が強く、河川敷や農耕地等に侵入するため、在来種や農作物への競合・駆逐のおそれがある。 侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 	指定時と状況は変わっていない。全国に広くみられる。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
アメリカネシカスラ	<i>Cuscuta pentagona</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> 多様な植物に寄生するので、在来種や農作物の生長を抑制するおそれがある。 侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 	指定時と状況は変わっていない。全国各地でみられる。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
セイヨウヒルガオ	<i>Convolvulus arvensis</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> 繁殖力が強く、農耕地では難防除の強害草とされている。 侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 植物防疫法により、指定地域からのヒルガオ属植物の輸入は禁止されている。 	指定時と状況は変わっていないか、生育数が減っている可能性がある。植物防疫法によるセイヨウヒルガオ属の輸入規制は解除されている。(植物防疫所HP 輸入条件に関するデータベースより http://www.pps.go.jp/eximlist/view/exp/condition.html) 被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
オオフタバムギ	<i>Diodia teres</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）	<ul style="list-style-type: none"> 鳥取砂丘を始め、近年も各地で分布を拡大しており、林縁等にも侵入することから、在来種との競合・駆逐のおそれがある。 侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 	指定時と状況は変わっていない。本州から九州で確認されている。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
アメリカアザミ	<i>Cirsium vulgare</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> 自然性の高い環境や牧草地に侵入するため、在来種や牧草と競合・駆逐のおそれがある。 鋭い棘を持つ植物なので、家畜や草食動物の有害植物となっている。 侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 植物防疫法により、指定地域からのアザミ属植物の輸入は禁止されている。 	指定時と状況は変わっていないか、各地で分布を拡大している可能性がある。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
カミレトキ	<i>Anthemis cotula</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> 畑地や牧草地に大発生し、乳牛が採食すると牛乳に異臭がつくため、問題になっている。 侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 	指定時と状況は変わっていないか、生育数が減っている可能性がある。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
ブタクサ	<i>Ambrosia elatior</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）、農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> 河川敷や牧草地等の他に、亜高山等の自然性の高い場所に侵入するため、在来種や農作物との競合・駆逐のおそれがある。 侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。 	指定時と状況は変わっていないか、生育数が減っている可能性がある。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等

植物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状	導入・利用の形態	
ブナナ	<i>Hypochoeris glabra</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	・河川敷や牧草地等へ侵入するため、河原に固有な在来種や牧草への競合・駆逐のおそれがある。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。	指定時と状況は変わっていない。全国に広くみられる。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
オオナモミ	<i>Xanthium canadense</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）、農林水産業	・河川敷や牧草地等へ侵入するため、河原に固有な在来種や牧草への競合・駆逐のおそれがある。 ・牧草地に侵入すると家畜に有毒であり、総苞の付着による羊毛の品質低下も問題になっている。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。	指定時と状況は変わっていない。全国に広くみられる。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
アメリカセンダングサ	<i>Bidens frondosa</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	・河川敷や水辺の在来植物への競合・駆逐のおそれがあるとともに、代表的な水田雑草の一つである。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。	指定時と状況は変わっていない。全国に広くみられる。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
コセンダングサ	<i>Bidens pilosa var. pilosa</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	・河川敷等に生育する在来植物や農作物への競合・駆逐のおそれがある。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。	指定時と状況は変わっていない。本州以南に広くみられる。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
オオアレチノギク	<i>Conyza sumatrensis</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）、農林水産業	・競争力が強く除草剤耐性型があるため、畑地、樹園地、牧草地に普通にみられる雑草になっている。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。	指定時と状況は変わっていない。本州以南に広くみられる。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
ヒメムカシヨモギ	<i>Erigeron canadensis</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	・河川敷等に侵入するので、河原の固有の在来種との競合・駆逐のおそれがある。 ・競争力が強く除草剤耐性型があるため、畑地、樹園地、牧草地に普通にみられる雑草になっている。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。	指定時と状況は変わっていない。全国に広くみられる。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
アメリカカキヤ	<i>Andropogon virginicus</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	・各地で近年になっても増加がみられるため、在来種や農作物との競合・駆逐のおそれがある。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。	指定時と状況は変わっていない。本州から九州でみられる。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
アメリカガヤツリ	<i>Cyperus eragrostis</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	・繁殖力が強く水辺を中心に分布を拡大しているため、在来の湿性植物との競合・駆逐のおそれが大きい。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。	指定時と状況は変わっていないか、気候の温暖化とともに分布が北上している可能性がある。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等

植物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状	導入・利用の形態	
シヨクヨウカ [°] ヤリ	<i>Cyperus esculentus</i>	農林水産業	・塊茎による繁殖力が旺盛な多年生草本で、牧草地や飼料畑に侵入して難防除の雑草になっている。 ・侵入経路や分布拡大のメカニズムを把握し、効果的な防除方法や分布拡大の抑制策の検討が望まれる。	指定時と状況は変わっていない。東北から九州に分布する。被害知見の集積は進んでいない。	非意図的	混入等
ハリエニシカ [°]	<i>Ulex europaeus</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・鋭く長い棘があるため、牧草地等に侵入すると家畜に有害で防除しにくい植物である。 ・既に各地で野生化しているが、分布拡大のおそれがある場合には、防除の検討が望まれる。	指定時と状況は変わっていない。定着、分布拡大したとの情報はない。被害知見の集積は進んでいない。	一部の地域で定着	混入等
ランカヤ	<i>Lantana camara</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・日本では、小笠原や沖縄等で野生化しており、分布拡大のおそれがある場合には防除の検討が望まれる。	小笠原諸島においてノヤギの駆除後に増加しており、在来植生への影響が懸念されている。分布拡大したとの情報はない。被害知見の集積は進んでいない。	一部の地域で定着	混入等
ヒマワリヒヨドリ	<i>Chromolaena odorata</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）、農林水産業	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・日本では、沖縄で野生化しており、分布拡大のおそれがある場合には防除の検討が望まれる。	指定時と状況は変わっていない。各地で野生化している。被害知見の集積は進んでいない。	一部の地域で定着	混入等
テリハバ [°] ンジ [°] ロウ	<i>Psidium cattleianum</i>	生態系（競合・駆逐）	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・日本では、小笠原で野生化しており、分布拡大のおそれがある場合には防除の検討が望まれる。	指定時と状況は変わっていない。暖地で栽培、一部野生化している。被害知見の集積は進んでいない。	一部の地域で定着	混入等
サシヨウモト [°] キ	<i>Schinus terebinthifolius</i>	生態系（競合・駆逐）	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・日本では、小笠原で野生化しており、分布拡大のおそれがある場合には防除の検討が望まれる。	指定時と状況は変わっていない。分布拡大したとの情報はない。被害知見の集積は進んでいない。	一部の地域で定着	混入等
アメリカハマク [°] ルマ	<i>Sphagneticola trilobata</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・日本では、沖縄で野生化しており、分布拡大のおそれがある場合には防除の検討が望まれる。	指定時と状況は変わっていないか、沖縄などの南西諸島で分布を拡大している可能性がある。被害知見の集積は進んでいない。	一部の地域で定着	混入等
モリシマア [°] カシア	<i>Acacia mearnsii</i>	生態系（競合・駆逐）	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。	指定時と状況は変わっていない。植物園などで栽培されているが、定着、分布拡大しているとの情報はない。被害知見の集積は進んでいない。	導入あり	混入等
セイロンマンリョウ	<i>Ardisia elliptica</i>	生態系（競合・駆逐）	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起さない適切な方法で行うことが重要である。	指定時と状況は変わっていない。植物園で栽培されているが、定着、分布拡大しているとの情報はない。被害知見の集積は進んでいない。	導入あり	混入等

植物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状	導入・利用の形態	
ヤツテ ^ク ガ ^ク リ	<i>Cecropia peltata</i>	生態系（競合・駆逐）	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。	指定時と状況は変わっていない。植物園で栽培されているが、定着、分布拡大しているとの情報はない。 被害知見の集積は進んでいない。	導入あり	混入等
キハ ^ナ シユクシヤ	<i>Hedychium gardnerianum</i>	生態系（競合・駆逐）	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。	指定時と状況は変わっていない。栽培されているが、定着、分布拡大しているとの情報はない。 被害知見の集積は進んでいない。	導入あり	混入等
オオハ ^ノ ホ ^ノ タン	<i>Miconia calvescens</i>	生態系（競合・駆逐）	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。	指定時と状況は変わっていない。植物園で栽培されているが、定着、分布拡大しているとの情報はない。 被害知見の集積は進んでいない。	導入あり	混入等
カエンホ ^ク	<i>Spathodea campanulata</i>	生態系（競合・駆逐）、 農林水産業	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。	指定時と状況は変わっていない。暖地で栽培されているが、分布拡大しているとの情報はない。 被害知見の集積は進んでいない。	導入あり	混入等
アキナ ^ク シ	<i>Cinchona pubescens</i>	生態系（競合・駆逐）	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。	指定時と状況は変わっていない。植物園で栽培されているが、定着、分布拡大しているとの情報はない。 被害知見の集積は進んでいない。	導入あり	混入等
アメリカナ ^ノ ホ ^ノ タン	<i>Clidemia hirta</i>	生態系（競合・駆逐）、 農林水産業	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。	指定時と状況は変わっていない。植物園で栽培されているが、定着、分布拡大しているとの情報はない。 被害知見の集積は進んでいない。	導入あり	混入等
タマリクス [・] ラモシシマ	<i>Tamarix ramosissima</i>	生態系（競合・駆逐）	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。	指定時と状況は変わっていない。定着、分布拡大しているとの情報はない。 被害知見の集積は進んでいない。	導入あり	混入等
リグ [・] ストム [・] ロブ [・] ストム	<i>Ligustrum robustum</i>	生態系（競合・駆逐）	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。	指定時と状況は変わっていない。定着、分布拡大しているとの情報はない。国内では栽培されていないと考えられる。 被害知見の集積は進んでいない。	未導入	混入等
カユフ ^テ	<i>Melaleuca quinquenervia</i>	生態系（競合・駆逐）	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。	指定時と状況は変わっていない。定着、分布拡大しているとの情報はない。 被害知見の集積は進んでいない。	未導入	混入等

植物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状	導入・利用の形態	
ミコニア・ミクランサ	<i>Mikania micrantha</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。	指定時と状況は変わっていない。定着、分布拡大しているとの情報はない。国内では栽培されていないと考えられる。 被害知見の集積は進んでいない。	未導入	混入等
ミモサ・ピグラ	<i>Mimosa pigra</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。	指定時と状況は変わっていない。定着、分布拡大しているとの情報はない。国内では栽培されていないと考えられる。 被害知見の集積は進んでいない。	未導入	混入等
モレラ・ファヤ	<i>Morella faya</i>	生態系（競合・駆逐）	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。	指定時と状況は変わっていない。定着、分布拡大しているとの情報はない。国内では栽培されていないと考えられる。 被害知見の集積は進んでいない。	未導入	混入等
オプンティア・ストリクタ	<i>Opuntia stricta</i>	生態系（競合・駆逐）	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。	指定時と状況は変わっていない。定着、分布拡大しているとの情報はない。国内では栽培されていないと考えられる。 被害知見の集積は進んでいない。	未導入	混入等
フランスカイガンショウ	<i>Pinus pinaster</i>	生態系（競合・駆逐）	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。	指定時と状況は変わっていない。栽培されているものはあるが、定着、分布拡大しているとの情報はない。 被害知見の集積は進んでいない。	未導入	混入等
プロソピス・グランドウロサ	<i>Prosopis glandulosa</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。	指定時と状況は変わっていない。定着、分布拡大しているとの情報はない。国内では栽培されていないと考えられる。 被害知見の集積は進んでいない。	未導入	混入等
キミヒマヤキイチゴ	<i>Rubus ellipticus</i>	生態系（競合・駆逐）	・国際自然保護連合（IUCN）の世界の外来入種ワースト100に含まれており、海外で問題になっている。 ・栽培にあたっては、管理されている場所や施設以外に、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要である。	指定時と状況は変わっていない。定着、分布拡大しているとの情報はない。国内では栽培されていないと考えられる。 被害知見の集積は進んでいない。	未導入	混入等

要注意外来生物リスト（選定の対象とならないが、注意喚起が必要な外来生物）

昆虫類

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状
ホリオチョウ	<i>Sericinus montela</i>	生態系（競合）	ジャコウアゲハとの競合が懸念されている。放蝶に由来すると考えられる分布拡大が見られる。 植物防疫法に基づく検疫有害動物として輸入が禁止されている種 であり、国内で意図的に放蝶して野外への定着を試みる行為は、被害の予防の観点からも、厳に慎むべきである。	茨城県西部において、産卵中のジャコウアゲハの雌に、本種の雄が執拗につきまとう産卵妨害行動が観察されている。 「月刊むし」などの昆虫雑誌で放蝶の自粛について注意喚起がなされている。 愛知県では条例で条例公表種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2011年3月30日指定）。
アホシゴマダラ	<i>Hestina assimilis</i> (在来 <i>H. a. shirakii</i> を除く)	生態系（競合）	ゴマダラチョウとの競合が懸念されている。 <i>Hestina assimilis shirakii</i> が奄美大島に在来で分布するが、神奈川県などで分布を拡大中の種は国外産の亜種である。 植物防疫法に基づく検疫有害動物として輸入が禁止されている種 であり、国内で意図的に放蝶して野外への定着を試みる行為は、被害の予防の観点からも、厳に慎むべきである。	神奈川県全域及び東京都、埼玉県に分布を拡大中。「月刊むし」などの昆虫雑誌で放蝶の自粛について注意喚起がなされている。 愛知県では条例で条例公表種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2011年3月30日指定）。

参考：財団法人自然環境研究センター（編）．2008．決定版日本の外来生物．平凡社．

無脊椎動物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状
アフリカマイマイ	<i>Achatina fulica</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）、農林水産業	食害により、在来植物や農作物に被害を与えるおそれがあり、南西諸島や小笠原に定着している。 植物防疫法により輸入や分布域からの持ち出しが規制 されており、これらの遵守が必要である。	2007年に鹿児島県本土で確認されており、分布拡大が危惧されている。人に対し、広東住血線虫症を発症させる広東住血線虫の有力な中間宿主であることが知られている。 植物防疫所などにより分布拡大阻止の注意喚起がなされている。
スクミリンゴガイ	<i>Pomacea canaliculata</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）、農林水産業	食害により、在来の水草や農作物に被害を与えるおそれがあり、関東以南に広く蔓延している。 植物防疫法により輸入が規制 されており、これらの遵守が必要であるとともに、国内でも未定着の地域に放すことのないよう注意すべきである。	農林水産省では各都道府県に対して、水田や河川などに生息する個体を処分するように指導しているほか、水稲への食害を防ぐための薬剤や誘因捕獲システムなどの開発が進められている。 人に対し、広東住血線虫症を発症させる広東住血線虫の有力な中間宿主であることが知られている。 滋賀県では条例で指定外来種に指定し、飼育者に対し届け出を義務づけるとともに、野外へ放すことを禁止している（2007年5月1日指定）。 愛知県では条例で条例公表種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2010年6月30日指定）。 一部の地方自治体や都道府県立博物館などで本種の分布拡大阻止の注意喚起がなされている。

参考：国立感染症研究所感染症情報センターHP (http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k04/k04_25.html)
財団法人自然環境研究センター（編）．2008．決定版日本の外来生物．平凡社．

要注意外来生物リスト（別途総合的な検討を進める緑化植物）

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状※	導入・利用の形態
イチハギ (クロハナエンジユ)	<i>Amorpha fruticosa</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）	自然性の高い地域への侵入がみられることから、そうした地域での法面緑化にはより影響の少ない種類を利用できるか検討する等の配慮が必要である。また、在来郷土種と誤解されている場合もあるので、外来種であることを理解した上で注意して利用する必要がある。	リンゴ栽培地周辺では、緑化目的を達成し得る範囲において、可能な限り新たな使用を避ける等の慎重な対応を図ることが望ましいとされている。 ・栽植用種子が中国から輸入されている。 ・要注意外来生物に選定されたことで利用されなくなった地域がある。 佐賀県では条例で移入規制種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2006年4月1日施行）。	意図的導入 緑化等
キンネム (キンゴウカン)	<i>Leucaena leucocephala</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）	緑化などのために沖縄や小笠原諸島に導入された。しかし、固有性の高い小笠原の島嶼生態系において、植物群集の構造を改変するなどの影響は大きく、未定着の地域に持ち込まないなどの配慮が必要である。	新たな輸入や導入は行われていないと考えられる。	意図的導入 緑化等
ハリエンジュ (ニセアカシア)	<i>Robinia pseudoacacia</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）	砂防林や薪炭材として導入され、良質の蜜源植物としても広く利用されている。しかし、各地の河川や海岸などでは繁茂し、希少植物を含む在来植物を駆逐するおそれがある。影響の大きい場所では積極的な防除または分布拡大の抑制策の検討が望まれる。	生物多様性保全上重要な地域においては、可能な限り、新たな使用を避ける等の慎重な対応を図ることが望ましいとされている。 リンゴ栽培地周辺では、緑化目的を達成し得る範囲において、可能な限り新たな使用を避ける等の慎重な対応を図ることが望ましいとされている。 札幌駅前通りに植えられる計画があり、問題視されている。 佐賀県では条例で移入規制種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2006年4月1日施行）。	意図的導入 緑化等
トウネスミチ	<i>Ligustrum lucidum</i>	生態系（競合・駆逐）	移植が容易で生長が速く、大気汚染に強いことなどから、街路樹や公園樹等として広く利用されている。しかし、訪花昆虫や果実食の鳥類への誘引力が強く、多数の種子が鳥により散布されて容易に分布を拡大する。そのため、都市近郊の二次林の種組成や河川敷の植生に影響を及ぼすおそれがある。利用に当たっては鳥による種子散布を考慮に入れ、地域によっては適切な代替物の検討が望まれる。	現在も、街路樹や公園樹等として利用されている。 愛知県では条例で条例公表種に指定し、野外へ放すことを禁止している（2011年3月30日指定）。	意図的導入 緑化等
ハイヨモギ	<i>Artemisia sieversiana</i>	生態系（競合・駆逐）	緑化に用いられる外国産の郷土種ヨモギに含まれる他、観賞用キクの接ぎ木台として導入された。在来種の遺伝的攪乱のおそれがあるため、逸出を防ぐための管理と、当該地域産の在来種または別種への転換の可能性について総合的に検討することが望まれる。	輸入や導入は行われていないと考えられる。	意図的導入 緑化等

主な参考資料

- ・環境省・農林水産省・国土交通省「外来生物の被害の防止等に配慮した緑化植物の取扱方針検討調査」
- ・植物防疫統計 <http://www.pps.go.jp/database/>
- ・雪印種苗株式会社とカネコ種苗株式会社のホームページ

※緑化植物については、資料2-8~9に示すとおり、平成17年度以降に関係省庁による調査及びその結果に基づく取扱い等に係る指針の策定・配布等を行う取組を進めてきた。

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状※	導入・利用の形態	
シナダレスズメギヤ (ウービソクアラブ グラス)	<i>Eragrostis curvula</i>	生態系(競合・駆逐、環境攪乱)	耐暑性と耐旱性に優れ、土壌侵食防止力が強い。法面緑化などに全国で用いられている。しかし、河川に侵入して砂を堆積するなどしたため、在来植物との競合・駆逐や、生育環境の改変が生じている場合がある。種子が河川に流入しないための適切な管理の可能性と、既に侵入したものについての防除の必要性や防除技術の検討、さらには適切な代替物の利用の可能性を検討することが望まれる。	使用を控えることが望ましいとされている。要注意外来生物に選定されたことで利用されなくなった地域がある。新たな輸入や導入は行われていないと考えられる。 佐賀県では条例で移入規制種に指定し、野外へ放すことを禁止している(2006年4月1日施行)。	意図的導入	緑化等
ホウシノケグサ (トールフェスク)	<i>Festuca arundinacea</i>	生態系(競合・駆逐)、農林水産業	永続性や土壌保全能力が高く、環境への適応性も高いことなどから、牧草や緑化植物として全国で広く用いられているが、自然性の高い環境や希少種の生育環境に侵入し、駆除の対象になっていることがある。逸出によるこうした問題が起こらないよう適切な管理を行うとともに、自然環境にも配慮した品種または他の種類の利用の可能性を検討することが望まれる。	イネ科植物を緑化材料として選定する場合には、緑化目的を達成し得る範囲において、可能な限り、草丈の低い種・品種、種子による繁殖力の小さい種・品種を使用することが望ましい。施工等を行う際には、上記の特性を持つ種の播種量や配合比率を小さくすることにより、使用量を控える等の工夫が望まれるとされている。 要注意外来生物に選定されたことで利用されなくなった地域がある。 ウシノケグサ属の植物の栽植用種子は欧米から輸入されている。国内で生産されている。 佐賀県では条例で移入規制種に指定し、野外へ放すことを禁止している(2006年4月1日施行)。	意図的導入	緑化等
カモガヤ (オチャートグラス)	<i>Dactylis glomerata</i>	生態系(競合・駆逐)、農林水産業	耐陰性などの様々な環境耐性を持つため、牧草や緑化植物として全国で広く用いられているが、自然性の高い環境や希少種の生育環境に侵入し、問題になっている。こうした場所では逸出による問題が起こらないよう適切な管理を行うとともに、自然環境にも配慮した品種または他の種類の利用の可能性を検討することが望まれる。	イネ科植物を緑化材料として選定する場合には、緑化目的を達成し得る範囲において、可能な限り、草丈の低い種・品種、種子による繁殖力の小さい種・品種を使用することが望ましい。施工等を行う際には、上記の特性を持つ種の播種量や配合比率を小さくすることにより、使用量を控える等の工夫が望まれるとされている。 栽植用種子が米国やデンマークから輸入されている。国内で生産されている。	意図的導入	緑化等
シバムギ	<i>Elymus repens</i>	生態系(競合・駆逐、環境攪乱)、農林水産業	耐塩性があり冷涼な環境に適した牧草として、寒冷地に導入された。しかし地域によっては逸出して難防除の雑草となり、在来植物との競合のおそれも生じている。適切な代替物の利用と分布拡大の抑制の可能性の検討が望まれる。 植物防疫法により、指定地域からのカモジグサ属植物の輸入は禁止されている。	イネ科植物を緑化材料として選定する場合には、緑化目的を達成し得る範囲において、可能な限り、草丈の低い種・品種、種子による繁殖力の小さい種・品種を使用することが望ましい。施工等を行う際には、上記の特性を持つ種の播種量や配合比率を小さくすることにより、使用量を控える等の工夫が望まれるとされている。 輸入や導入は行われていないと考えられる。	意図的導入	緑化等

主な参考資料

- ・環境省・農林水産省・国土交通省「外来生物の被害の防止等に配慮した緑化植物の取扱方針検討調査」
- ・植物防疫統計 <http://www.pps.go.jp/database/>
- ・雪印種苗株式会社とカネコ種苗株式会社のホームページ

※緑化植物については、資料2-8~9に示すとおり、平成17年度以降に関係省庁による調査及びその結果に基づく取扱い等に係る指針の策定・配布等を行う取組を進めてきた。

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	要注意外来生物選定当時の摘要	現状※	導入・利用の形態	
ネズミギク・ホムギ (イタリアライグラス・ペレアルライグラス)	<i>Lolium multiflorum</i> ・ <i>L. perenne</i>	生態系（競合・駆逐）、農林水産業	環境への適応性が高く牧草や緑化植物として全国で広く用いられている。しかし、自然性の高い環境や希少種の生育環境に侵入し、駆除の対象になっている場合がある。逸出によるこうした問題が起こらないよう適切な管理を行うとともに、より影響の少ない品種の有無の検討や他の種類の利用可能性の検討が望まれる。	イネ科植物を緑化材料として選定する場合には、緑化目的を達成し得る範囲において、可能な限り、草丈の低い種・品種、種子による繁殖力の小さい種・品種を使用することが望ましい。施工等を行う際には、上記の特性を持つ種の播種量や配合比率を小さくすることにより、使用量を控える等の工夫が望まれるとされている。栽植用種子が米国などから輸入されている。国内で生産されている。	意図的導入	緑化等
キシュウスズメノヒエ	<i>Paspalum distichum</i> var. <i>distichum</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）、農林水産業	耐湿性や耐塩性があるため、湿田や水田転換畑での飼料として利用が試みられたが、水田や水路で雑草化し、湿地の在来植物との競合のおそれが生じている。適切な代替物の利用と、分布拡大の抑制が望まれる。	イネ科植物を緑化材料として選定する場合には、緑化目的を達成し得る範囲において、可能な限り、草丈の低い種・品種、種子による繁殖力の小さい種・品種を使用することが望ましい。施工等を行う際には、上記の特性を持つ種の播種量や配合比率を小さくすることにより、使用量を控える等の工夫が望まれるとされている。輸入や導入は行われていないと考えられる。	意図的導入	緑化等
オアワカエリ (チモン)	<i>Phleum pratense</i>	生態系（競合・駆逐、環境攪乱）、農林水産業	冷涼な環境に適した牧草として、寒冷地で広く用いられているが、自然性の高い環境や希少種の生育環境に侵入し、駆除の対象になっていることがある。こうした場所では、牧草地からの逸出が起こらないような適切な管理を行うとともに、より影響の少ない品種や他の牧草の利用の可能性を検討することが望まれる。	イネ科植物を緑化材料として選定する場合には、緑化目的を達成し得る範囲において、可能な限り、草丈の低い種・品種、種子による繁殖力の小さい種・品種を使用することが望ましい。施工等を行う際には、上記の特性を持つ種の播種量や配合比率を小さくすることにより、使用量を控える等の工夫が望まれるとされている。栽植用の種子が米国やカナダから輸入されている。国内で生産されている。	意図的導入	緑化等

主な参考資料

- ・環境省・農林水産省・国土交通省「外来生物の被害の防止等に配慮した緑化植物の取扱方針検討調査」
- ・植物防疫統計 <http://www.pps.go.jp/database/>
- ・雪印種苗株式会社とカネコ種苗株式会社のホームページ

※緑化植物については、資料2-8～9に示すとおり、平成17年度以降に関係省庁による調査及びその結果に基づく取扱い等に係る指針の策定・配布等を行う取組を進めてきた。